

本論文は、日本の帝国支配をいけ花を通して考察し、いけ花史を再考するとともに、いけ花の新たな側面を提示する目的をもつものである。

すでに拙著『「花」の成立と展開』（和泉書院 2007 年）で、近代においていけ花が日本人女性必須の嗜みとしてあったことを明らかにし、帝国日本の植民地においても、特に都市部において行われ、そこにおける他民族の場合、いけ花をはじめとする日本の伝統的文化と直接かかわることがあったのは、主に女学校・高等女学校という女子中等教育の場であったことを指摘してきた。

内地のみならず植民地においても、いけ花は女性たちの趣味・娯楽・修養として広く存在した。このことにより、いけ花から帝国支配を考えることは有効なことといえる。直接的な武力支配ではなく、文化の浸潤によっても支配が存在した様相を、明らかにすべきと考えた。

第 I 部は、いけ花の歴史について、男性から女性へといういけ花の担い手の変化に留意しつつも、主にいけ花の様式と社会のかかわりを明らかにした。

第 1 章では、中世における、いけ花の最初の様式である「たて花」の成立から、近世における「立花」様式の確立を経て、「生花」様式の成立までを考えた。

第 2 章では、近代における「盛花」様式の成立と、いけ花の、社会におけるその後の展開を考え、女学校・高等女学校では「生花」様式と「盛花」様式が教えられたことを明らかにした。

第 II 部は、第 I 部のいけ花史研究の成果を踏まえ、帝国日本におけるいけ花を考えた。第 II 部全体としての研究方法は、いけ花という 1 つの事象から台湾、朝鮮、満洲、サイパンと、帝国支配を網羅し、横断的にみることである。また文献のみならず現地調査、聞き取り調査、写真資料をはじめ、立体的に当時の生活を再現することを試みた。女学校・高等女学校の場合、校友会誌が生徒の日常生活と学校とを繋ぐものであったが、家庭や日常生活にかかわるいけ花・茶の湯に関しては、この学校と家庭とを結ぶ雑誌である校友会誌に記事が掲載されることも多いため、主要史・資料として扱った。

第 3 章では、近代における内地の高等女学校のいけ花・茶の湯・礼儀作法、武道について確認しつつ、1870 年から 1877 年の間に開校して現在に続く内地のキリスト教主義女学校 5 校を中心に、その取り入れを考察した。ここからは欧米人、異国の宗教であるキリスト教による女学校において、日本が近代化を進める上で、キリスト教を軸として他民族と関わり、また諸外国と戦争を行うという時代性において、日本人としての精神を再認識し、聖書における精神修養と日本の伝統的文化における精神修養を並行して取り入れ、相容れないものではあるものの、共に人格形成のよりどころとしたといえる。

第 4 章は、台湾について考えた。特に同地では礼儀作法教育が統治する側の文化として重視され、日本人社会において、いけ花をはじめとする日本の伝統的文化は盛んに行われた。

しかし台湾人生徒には、日本人以上に日本人としての営みが教えられたものの、家に帰れば台湾人としての暮らしがあり、学校では訓練、練習として日本人の生活があった。しかしいけ花等への台湾人卒業生の記憶は、日本人卒業生に比べ鮮明である。そこには、支配者側の文化への相容れない思いや、畏怖とともに、異文化への興味やあこがれがあったのではないかと考えられる。

第5章は、朝鮮について考えた。第1節では、同地の女学校・高等女学校における教育を、日本人を主とした学校、朝鮮人を対象とした公立の学校、朝鮮人を対象とした私立の学校、内鮮共学の学校にわけその実態を明らかにし、台湾との相互参照をおこなった。そこには生活空間、風土の相違からくるものも一因といえる。第2節では、朝鮮戦争後、いけ花がコッコジ（韓国いけ花）と名を変えて、日本のいけ花を習得した韓国人女性たちによって広められ、流行したことに着目した。この女性たちは高等女学校を卒業していた。しかしコッコジは外観はいけ花であっても、いけ花が今日に続く上での本質的な部分は見過ごされているものであり、そこに日本人として生きた朝鮮人（韓国人）女性たちの行き場のないアイデンティティが露呈する。

第6章は、満洲について考えた。第1節では、いけ花に関する活動から都市部での日常を明らかにした。これまで満洲都市部における日本人の日常生活は、明らかにされることが少なかった。第2節は、『女性満洲』という1942・45年発行の全満唯一の女性文化誌には、いけ花の講座、いけ花の言説が掲載されていることに着目した。また、満洲・中国に慰問として草月流勅使河原蒼風が訪れていることに着目し、戦時下における、外地のいけ花を考えた。第3節は、満洲文学といけ花について考えた。満洲国建国十周年を記念して、満洲国を代表すべき文化総合雑誌としてだされた『芸文』に、いけ花をモチーフにする小説が、満洲文学の第一人者である北村謙次郎によって発表されたことは、当時のいけ花が、注目に値するものであったことがいえる。第4節は、女学校・高等女学校におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法の取り入れについて考察した。これまで、満洲の高等女学校についての具体的な考察は見当たらない。内地と異なる広大な土地での生活に、日本人としての振舞いを忘れることがないように教育されたことがわかる。

第7章は、サイパンについて考えた。同地の高等女学校の存在、その設立の中心となった人物に焦点をあて、いけ花等の取り入れからサイパンならびに高等女学校を考え、他の植民地のありようも念頭においたとき、同地のありようは、「同化」「国策」というよりも「郷土」であったといえる。

以上、いけ花から帝国支配を考えると、植民地間の風土、生活のありかたの相違から、植民地支配のありようも異なるといえる。しかし台湾や朝鮮の高等女学校において日本人としての教育を受けた女性たちの記憶や解放後の伝統的文化の受容状況から共通して、宗主国日本の文化に対する拒絶とそれとは裏腹の畏怖を伴う憧れ、異文化への興味が窺われるのも、事実であると考えられる。